

【平成23年 4月 地域警察官特別派遣部隊 男性警察官(27歳)】

「災害派遣活動を終えて・・・」



私は3月30日から4月6日までの間、地域警察官特別派遣部隊の一員として、岩手県で主に被災地および避難所の警戒・警ら活動に従事しました。

活動場所は陸前高田市。報道などで知っている方も多いと思いますが、岩手県内でも甚大な被害に見舞われた地区です。そこには私たち警ら部隊のほかにも、大阪府警高速隊が至るところで交通整理を実施し、また、警視庁第三機動隊や陸上自

衛隊、海上自衛隊、海上保安庁が陸上や海上で行方不明者の捜索をしていました。同地区ではすでに千人以上の死者が確認されており、今なお多数の方が行方不明となっています。警ら中も無線を聞いているだけで、約30分に一体のペースで遺体発見の報告が入っていました。また、私自身も警ら中に「遺体を発見した」という届出を何度も受けました。

初めて陸前高田市に足を踏み入れ、市街地を見たとき「本当に町が壊滅している」と、それ以上の言葉が出ませんでした。実際、私は以前までの市内の姿を知りません。地図を見る限りではそこは娯楽施設や商業施設が建ち並んでいる場所のようなのですが、見渡す限り瓦礫の山だけで、そこが震災前に栄えていた場所だとは到底思えませんでした。建物や橋が決壊し、瓦礫や木片が山積みの現状はテレビや報道で見る以上にショッキングなものでした。

また、その市内の中心部にあった高田幹部交番では3名の警察官が津波に巻き込まれ、2名が殉職、交番所長は未だ発見されていませんでした。殉職された2名のうちの1名は、私の当番日に発見されました。無線で「警察官の制服を着た遺体を発見した」との報告を聞いたとき、同じ警察官として胸が締め付けられる思いがしました。さらに後日聞いた話では、その警察官は警察学校を卒業したばかりで、交番に赴任したその当日に被害に遭われたとのことでした。

避難所警戒では、避難されている方と話をする機会もあり、パトカーを見るなり深くお辞儀をしてくれる方もおりました。あるときは、「津波に巻き込まれた親子が助けを求めている声を聞いたけれど、救助してあげられなかった」と自らを責めるように話す老女もいました。それを聞いたとき、私はなにも答えることができず、ただ話を聞いてあげることしかできませんでした。私が制服姿で立ち寄ったことで、怖い体験を思い出させてしまったのではないかとも思いましたが、その方から「わざわざここまでパトロールしてくれてありがとう。パトカーの赤色灯をみると安心する」と言っていたら、私たちの活動が被災者の方に少しでも安心感を与えることができたのではないかと感じました。

今回の派遣活動はとても厳しい勤務でしたが、私にとって貴重な経験になりました。不眠不休で職務に当たる大船渡署員や、震災に負けず前を向いて歩こうとしている被災者の方々に接し、私自身も勇気と元気をいただきました。同時に、自分には帰りを待ってくれ

る家族がいて、暖かい家で温かいご飯を食べられる。今まで当たり前のように思っていたことが、こんなにも大切なことなのだとということを身に染みて感じました。この経験は一生忘れません。

今回の震災や災害派遣を通じて学んだことを職務に活かし、これからの職責を全うしていきたいと思えます。

